

(様式2)

令和

3年度

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1570301778		
法人名	社会福祉法人 上越市社会福祉協議会(安塚支所)		
事業所名	グループホーム安塚やすらぎ荘		
所在地	新潟県上越市安塚区安塚2549-5		
自己評価作成日	令和3年8月12日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/15/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人新潟県社会福祉士会外部評価機関「あいエイド新潟」		
所在地	新潟市中央区上所2-2-2 新潟ユニゾンプラザ3階		
訪問調査日	令和3年9月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

1. ご利用者と共に活動し支えあう自立支援
日常生活の様々な場面で、利用者同士、また利用者と職員とが協力し、毎日楽しく生活しています。利用者を一方的に介護される対象と考えるのではなく、日々の生活において、一人ひとりに合った役割を持ち、互いに助け合っ中で、生き活きと輝いて生活していけるような支援のあり方を目指しています。
2. 建物・立地
平成24年8月に開設した2階建ての複合施設で、グループホームは2階にあります。安塚区の中心部に位置し、周辺はのどかな景色に囲まれ、四季折々に豊かな自然を楽しむことができるほか、診療所や総合事務所、小学校、スーパーなどの地域資源が近くにあり、地域に根ざす上越市社会福祉協議会が設置運営母体となっています。施設には、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、ヘルパーステーション、デイサービスセンター、ショートステイの各事業所を備え、社協安塚支所事務局が設置され、地域福祉の拠点として様々な福祉サービスが提供されています。
3. 地域との連携
運営推進会議をはじめ、地域防災協力員、地域住民の方や行政、医療機関とも連携できる体制づくりを進めています。地元ボランティア団体の来所も多くあります。地域とのつながりを大切にしながら、互いに支え合う関係づくりを大切にしていきたいと考えています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、過去に地震で被災し閉鎖した経緯があるが、地域住民からの多くの要望を受けて現在地に移転し再開した。建物はヘルパーステーションやデイサービスセンター、ショートステイの在宅サービス事業所と、地域包括支援センターや居宅介護支援事業所、市社会福祉協議会支所事務局が併設して、住民のニーズに応じた生活支援や生活に関する様々な相談に総合的に対応できる体制を備えた複合施設である。過疎化が進み、高齢化率が高く、住民同士の助け合い精神が残る中山間地域において、福祉の総合的な拠点として重要な役割を担っている。

事業所は、「共に生き、共につくる」という法人の基本理念の下、地域の役員が中心となって構成する「施設応援隊」や民生・児童委員、老人クラブ、住民ボランティア等、多くの支援を受けながら共に歩みを進めている。

法人内で唯一のグループホームであり、管理者と職員はその存在意義を共有して、認知症ケアの質の向上に取り組んでいる。今年度より身体拘束と虐待の防止に重点をおいて取り組んでおり、職員は高い意識と感性を持ち、日々自問自答し職員間で意思疎通を図りながら振り返りを大切にしている。利用者一人ひとりに丁寧に寄り添い、笑顔と笑い声を引き出しており、事業所内は温かい空気感に包まれている。利用者の「自立と幸せ」を追求し、生活者として家事や様々な活動や作業に参加できるよう、一人ひとりの力に合わせて創意工夫しながら職員一丸となって支援している。

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を目につくところに貼っている。毎朝の全体ミーティングで唱和している。法人の理念に添ってグループホームの目標を設定し職員で共有している。	法人の基本理念や行動理念等を具現化するために、事業所の目標を作成している。目標はリビングに掲示して職員がいつでも確認できるようにしているほか、利用者の個人通信に明記して利用者や家族にも周知している。目標は職場会議の中で振り返る機会を設け、年度末には評価を行い、「笑顔」と「一人ひとりの声」を大切にしたり、利用者の「個々の力を活用」して自立と幸せの実現に向けて日々取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で、地域のボランティアや地域行事への参加に制限が生じており、望ましい状態ではない。小学生や野菜を寄付してくださった地域住民と「手紙」による交流をすることがある。運営推進委員は、直接交流することはできないが、グループホームの運営について多彩な意見を下さり陰で運営を支えて下さっている。	地域の一員として自治会に加入し、地域の清掃活動やお祭り等に参加したり、小学校の行事に招待を受けたり、ボランティアの訪問を通じて交流を深めている。事業所の近くには区総合事務所や診療所等があり、地域の人が気軽に立ち寄ってくれる。コロナ禍では直接的な交流はできなくなったが、2階のテラスから登下校の小学生を見守ったり、地域の方からは野菜の差し入れがある等、つながりを持ち続けている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	計画作成担当者が地域のケアマネージャーの会議の中で「認知症」や「グループホームの役割」について講師として出席したり、管理者が法人内の他事業所に出向いて介護員向けに認知症やグループホームの事例についての研修を行った。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	令和2年度はコロナ感染予防のためほとんど書面での開催であったが、今年度は感染予防をしながら会議として開催している。書面であっても対面であっても、委員は熱心に運営について考え活発な意見交換が成されている。	会議は利用者・家族代表、町内会長、老人クラブ会長、民生委員会、市担当者、地域包括支援センター職員、社会福祉協議会支所長、複合施設所長の参加で2か月に1回開催している。会議では事業所の状況や取り組みを報告したり、利用者の様子を写真で伝えている。今年度は身体拘束と虐待の防止に向けた事業所の取り組みを共有し、委員と職員と一緒に考える機会を設けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進委員として市の福祉担当職員が毎回の会議に参加し、GHの現状報告を行い協力体制が得られるきっかけになっている。	市担当者や地域包括支援センター職員は運営推進会議への出席を通じて事業所の現状や取り組み、目指す方向性について理解が得られている。市とはコロナワクチン接種の進め方や行政手続き等で連絡を取り合う等、日常的にも気軽に相談・協力が得られる関係性が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年6回の身体拘束を防ぐための検討会を、運営推進会議内で実施するとともに、同じ内容をグループホーム職員で共有している。フィジカルロックだけでなく、スピーチロックやドラッグロックについても考える機会を持っている。	全職員は「身体拘束はしない」との強い意識を持ち、何が身体拘束にあたるのか、日常の業務の中で確認し合い、身体拘束のないケアの実施に取り組んでいる。不適切な言葉がけがあった時には管理者から問いかけをし、振り返る機会を設けている。帰宅要求のある利用者には家族を含めて話し合いを重ね、利用者が抱える「不安」をしっかりと理解し対応している。コロナ禍における外出の自粛は身体拘束になり得る可能性があると考えており、細心の注意を払っている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	年に1回は虐待に関する研修会を開催している。GHでは身体的虐待だけでなく言葉遣いや態度による心理的虐待が起こらないように振り返りを行っている。	全職員は虐待はあってはならないこととして認識している。日々の業務の中で利用者への言葉がけや対応にも注意を払い、振り返る機会を大切にしている。小さなことでも常に問題意識を持ち、接遇に関する「5つの約束事」をリビングに掲示して意識付けを行っている。管理者は職員の疲労やストレスにも気を配り、日頃から職員とのコミュニケーションに努めている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	具体的に学ぶ機会は現在までに得られていないが、法人において日常生活支援事業を受任しておりいつでも情報が得られ活用できる体制になっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書、重要事項書その他「入所に関する留意事項」などわかりやすい案内を提示するなど内容に理解が得られるように努めている。料金改定の際にはその都度文書を作成、交付し十分な理解が得られるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者・家族に対して定期的にアンケートを実施し、意見や希望を受け止め検討している。ご家族に対しては担当者会議だけでなく、メールや電話を活用したり、面会時に現在の状況をお伝えしている。ご利用者は、意見を表現できないことも多いため、表情や普段の対話の中で思いをくみ取るようにしている。	職員は日頃から利用者・家族と接する時には笑顔で受け答えができる雰囲気づくりに努めており、利用者やゆっくり話す時間を持っている。また年1回利用者と家族へのアンケートを実施して利用者や家族の声を拾い上げるように取り組んでいる。コロナ禍では家族と直接接することができなくなったが、電話やメールを用いて、丁寧に聞き取りを行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職場会議や普段の申し送りの時間に職員の困っていることや悩みを聞くようにしている。年に2回支所長との個人面談が実施されている。	管理者は日頃から職員とのコミュニケーションを図り、直接意見や提案を聞いているが、職場会議は現在不定期開催となっており、意見聴取の機会が減っている。職員からは利用者への支援に関する意見が多く、洗濯物を干す位置や場所について提案があり変更している。職員は年2回代表者との面談で直接意見を表出できる機会があるほか、予算が伴う提案や要望については管理者が連絡調整会議において代表者に伝わる仕組みになっている。	管理者は業務の中で職員から意見や要望の集約に努めているが、意見収集のために多くの職員が参集する職場会議の場を有効に活用することでより一層様々な意見を引き出せるきっかけになると考えられる。職場会議を定期的に開催して、職員間で意見交換して集約したり、運営に関する事項を協議する場を定期的に持つことは大切であり、今後の取り組みに期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員それぞれが役割を持つと同時に、頑張っていることや困っていることを上司や他の職員と共有するように努めている。より安定した運営のために職員の増員を求めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	実践者研修、実践者リーダー研修、初任者研修をはじめ、外部研修に参加している他、支所内の研修も年間計画に基づいて実施している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流は、現在のところ機会がない。ただ、個々の職員においては個人的な同業者との繋がりがある職員も多く日常会話の中で情報交換する部分はある。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活情報の聞き取りと職員間の共有を図り、本人の訴えに耳を傾けながら対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期の面接や面会時の家族の思いや声をその都度聞いて家族との信頼関係が得られるようにしている。家族から発信のない時もホームでの様子(良い事も悪い事も)を都度お伝えし安心して頂けるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所判定会議の審議において、グループホーム以外の他のサービスによる支援の可能性も検討し、必要に応じて家族に助言を行う事もある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	大切にしている目標のひとつであるが、個人の心身の状態や能力、嗜好や特技を考慮し、調理・洗濯などあらゆる活動に取り組んで頂いている。ご利用者にさりげない感謝や賞賛の声かけをし、達成感を共有するようにしている。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍でご家族は従来のご利用者と触れ合っ て交流する機会を失っている。ご家族はご利用者にと ってかけがえのない存在であり拠り所であり、「ガラス越し の面会」や「電話」「交換ノート」「手紙」「個別おたより」 などを通して繋がりを維持していただくよう努めている。	家族と一緒に利用者を支えるための良好な関係づくりに努めている。これまでは外出・外泊のお願いや行事への参加を通じて家族と一緒に過ごす時間を大切にしてきた。現在は利用者の様子は電話で伝えたり、メールや個人通信等では写真を用いて情報共有に努めている。日用品の準備や通院は基本的に家族対応となっている。コロナ禍では通院時の付き添いが利用者が家族と直接会い、過ごせる限られた時間となっている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍になって以来、馴染みの場所に行き来することや、馴染みの人に自由に入ってもらえる機会が減っている。手紙の書ける(読める)ご利用者、電話で話せるご利用者には、可能なツールを利用し関係を切らないよう努めている。	センター方式のアセスメントシートを活用して、様々な情報を収集し整理して一人ひとりにとっての馴染みの関係の把握に努めている。これまでは併設事業所を利用する近所の人と面会したり、事業所の近くまで来た友人が立ち寄ってくれたりして馴染みの関係が継続できていた。コロナ禍では馴染みの美容師に来訪してもらったり、暑中見舞いや年賀状、手紙等により、これまでの関係性が途切れないように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性は特に重要であり、争いや孤立が起きないように、配席や仲介、気分転換などに配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談に応じる姿勢はあるが、今年度は退所されたご利用者・ご家族と交流する機会はなかった。亡くなったご利用者のお参りをさせていただいた程度。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所時のご家族からの聞き取り、普段のご利用者との対話、ご家族との対話の中で、生活習慣や好み、願いなどの把握をするように努めている。現在に至っても、ふとした対話の中で新しい情報発掘もあり、生活や活動に反映させている。	職員は利用者との日々の関わりを大切にしており、その中で一人ひとりの思いや意向の把握に努めている。把握した思いや意向は個別の生活記録に利用者が発した言葉をそのまま記載して職員間で共有を図っている。入浴などの生活場面で見られる利用者の表情や反応などの気づきを見逃さないようにして接している。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントシートを用意し、一人一人の情報について整備を進めている。また、職員間で情報共有が出来るように努めている。	入居前の事前面談において、独自にアレンジを加えたセンター方式のアセスメントシートを活用して、これまでの暮らしや生活歴の把握に努めている。またこれまで利用していた居宅介護支援専門員やサービス事業所からも情報提供を得ている。入居後も利用者との関わりの中で把握したり、家族に昔のことを確認して、利用者への支援に活かせるようにしている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の状況を生活記録に記載し、月末に居室担当職員が支援経過をまとめ、現状や状態変化などの把握に努めている。申し送りノートやミーティングを活用し全職員で情報の共有をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	居室担当がまとめる支援経過を見ながら、介護計画の達成状況を評価し、現状に即した介護計画が作成できるように配慮している。	計画作成者によるアセスメントと、利用者や家族の意向、利用者との日々の関わりを通じて得た情報や担当が行うモニタリング等をもとに介護計画を作成している。必要に応じてかかりつけ医や看護師からも意見聴取して介護計画に反映している。サービス担当者会議には利用者・家族が参加していたが、コロナ感染流行以後は中止している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々得られた情報は生活記録や申し送りノートに記載され、支援経過で現状を把握し情報共有され、介護計画の見直しにも反映されている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人を支える家族の事情にも配慮し、受診の付き添い、衣類や必要物品の買い物代行等を支援している。入浴形態や食事形態が変わったご利用者に対しては併設のデイサービスやショートステイと連携し対応できている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在、歌や踊りのボランティアの受け入れ、子供との交流行事など制限されている。運営推進委員や災害時の地域協力隊、野菜や物品寄付をくださる地域住民などに影で支えられている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は希望により決めていただいている。必要に応じてかかりつけ医から専門医への紹介状を頂き受診されることもある。かかりつけ医は、2週間に一度の処方方と、4週に1回の定期往診をして下さる。	受診は基本的には家族対応であるが、必要に応じて事業所でも対応したり、職員が同行している。利用者の情報については書面でまとめて事前に報告したり、併設施設と兼務する看護師が医師と連絡を取り合っており、適切な医療を受けることができるように支援している。現在は全利用者が協力医に転医しており、訪問診療の際には、看護師と管理者が付き添っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎朝、看護師による健康状態把握が行われている。利用者の変化があれば日中も夜間も看護師にすぐに相談でき、必要に応じて看護師からかかりつけ医に連絡をとり指示を受ける事ができる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先の病院と、管理者・計画作成担当者・看護師・かかりつけ医・職員が、入退院時の情報を共有し一貫したサービスを提供できている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所として出来る事/出来ない事をご家族にお伝えし、今後の環境について話し合っているが、急激に状態が悪化するような事例があり、日頃からの十分な話し合いの必要性について考えさせられた。	重度化した場合や状態変化に応じて本人、家族の意向を踏まえて、かかりつけ医や看護師の意見を聞き、事業所としてできること、できないことを説明して理解を得ている。利用者の病状や心身の状態により、どこでどのように過ごすことが望ましいのか話し合いを重ね、地域の関係機関と連携しながら支援に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年1回は消防署を招いてAEDによる救急救命の講習を実施しており全職員が学ぶ機会を得ている。また、緊急事態が発生した際に職員がどのように動くかマニュアルが設置されている。	年1回消防署の指導により、全職員がAEDの取り扱いや救急法について研修している。夜間急変時対応マニュアルや看護師との24時間連絡体制が整備され、利用者個々の緊急連絡先が職員に周知されている。職員は日常業務の中で急変時の対応等について看護師から指導を受けたり確認している。	消防署のプログラムによる講習には全職員が参加して救急対応を習得している。今後は事業所の実態に合わせ、利用者の状況等から実際に起こり得る事故を想定した実践的な内容の訓練を行い、実践力をさらに身につけていくことが必要であり、今後の取り組みを期待したい。
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	施設全体で防災委員会を設置し年3回の防災訓練を実施している。消防署職員、運営推進委員、地域協力隊も参加し有事に備えている。	併設事業所と合同で年3回地震や火災、夜間を想定した避難訓練を実施しており、その中で発電機の試運転や段ボールベッドの組み立て等を行っている。また毎月1日と15日には防災放送の訓練・点検も実施している。災害時には地元町内会から地域防災協力員として協力を得られる体制があるほか、地域の防災訓練に参加したり、福祉避難所の指定を受けて地域や市との連携を図っている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年1回のプライバシー研修が行われているが、定期的に職員意識の振り返りが必要である。個人情報観の観点からは写真撮影や名前の表示等についてご家族から同意書を頂いている。	利用者への関わりが礼を欠いた慣れ合いにならないよう、接遇に関する「5つの約束事」をリビングに掲示して意識づけを図り、常に利用者を尊重して笑顔で丁寧に対応している。職員は利用者の尊厳や特性に合わせた言葉かけや羞恥心への配慮をしている。また、認知症介護実践者研修やリーダー研修を受講し尊厳や権利擁護について学んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	施設や職員の事情優先で介助していないか振り返る必要はある。ご利用者の何気ない会話や発信において希望を表出される事もあるため傾聴するようにしている。個々の気持とペースを尊重しながら支援するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	就寝時間、食事時間、入浴回数、何をして過ごすか/何をしたくないか、概ねの流れに従って声かけはするが、無理強いにならないようお一人お一人のペースを尊重するようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪については、訪問理美容を利用しており、衣類についてはご家族が用意して下さるが、普段のコーディネートは個々のご利用者のご希望を尊重している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	誕生日には希望の献立(ビールなども含めて)を提供している。それ以外にも、地産野菜を使った郷土料理や栄養士が決めた献立以外に希望の献立を提供することがある。何より、ご利用者と共に調理準備や盛り付けを行い準備から楽しめるように努めている。	献立は利用者の好みや食べたい物に合わせて、その時々で変更している。プランターで栽培した季節の野菜や地域住民から差し入れされた山菜等を取り入れたり、おはぎや笹団子作り等をして、食事が楽しみになるよう取り組んでいる。職員は食事は作ることも食べることも利用者にとって暮らしの中で最も楽しみなこととして考えており、食事作りや片付けを一緒に行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士により作成された献立表をもとに食材を発注し食事作りをしている。体調や嚥下状況によっては、医師・看護師に相談し、本人の食べやすいものに変更したり、栄養補助飲料等を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	年に1回は歯科医による歯科検診を行い、月に1度は法人の歯科衛生士が口腔ケアの指導を行っている。職員はこれらの指導をもとに口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	清潔に、気持ちよく排泄していただけるよう、ご利用者ごとの排泄の習慣を把握し、それぞれに違った介助方法を行っている。	排泄記録表や観察を通じて普段の排泄状況を把握し、利用者一人ひとりに合わせてトイレでの排泄を支援している。さりげない声かけや手引きでトイレ誘導を行うことで羞恥心に配慮している。トイレでの排泄支援を継続することで、排泄の自立へと改善した例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況を極力把握するようにしている。食事量、水分摂取量に配慮し、適正な食物繊維の摂取、味噌や発酵食品の摂取、レクレーションや体操を通して自然排便を促す環境づくりをしている。本人の訴えや排便状況によっては医師・看護師に相談し薬を処方してもらうこともある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	時間を自由に決めて頂くことは難しいが、なるべく希望や体調、気分に応じて相談させて頂いている。デイサービスの一般浴、個室浴、機械浴、GHの家庭浴からご本人の希望や状態によって利用させて頂いている。	利用者の希望する曜日や時間に対応できるように配慮されており、週2回以上の入浴を支援している。一人ずつの入浴で職員がゆったりと関わっており、利用者との会話を大切にしている。入浴剤を使用しより楽しみな入浴時間となるよう取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ふとん干し、シーツ類の洗濯を行って清潔な環境で休んで頂けるようにしている。就寝や活動への声かけは行うが、無理強いにならないように、一人一人のペースで休めるようにして頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の配薬は看護師が管理をし、用法や用量についての指示、アドバイスが得られる。かかりつけ医への定期的な状態報告と、その他の受診情報は全職員で周知するようにしている。薬は服用しやすいよう、ご利用者によっては粉薬への変更や服薬ゼリーの使用など個々に合った方法で行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	グループホーム内で行われる家事全般に利用者が参加して共に作業する機会が設けられている。レクリエーションや作業において、それぞれの得意/不得意、嗜好、意向に配慮しつつ全員が「自分は活躍できている。」と感じられる活動を提供するようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ひとりひとりのその日の希望によって外出支援はできていない。	これまではブドウ園や物産館、温泉、公園の散策など、家族の協力も得ながら出かけていたが、コロナ禍では外出の自粛が続いている。現在は天気の良い日にはテラスに出て日光浴を楽しんだり、事業所敷地内にあるごみ収集所にごみ捨てに出かけたりして、感染状況を見ながら少しずつ外出できる機会を増やしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、手元で現金を管理しておられるご利用者はおらず、コロナ禍になってから店に入っの買い物支援は実現していない。カタログによる靴の購入や希望される日用品の買い物代行は行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人が希望する時には、電話を使用してご家族と話をしていただけよう支援をしている。面会時に手紙や塗り絵の作品を渡されるご利用者も何人かおられる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	館内のスペースは限られているが、できるだけ植物を配置したり、壁面に写真や季節の飾りつけをしており、それをご利用者も立ち止まって見たり楽しんでいる様子がある。	共用空間は明るく清掃が行き届いている。壁面の飾りつけは利用者と一緒に作り、掲示されている作品や写真からは温もりを感じ取ることができる。廊下奥のテラス付近には椅子があり、利用者は陽の温かさを感じたり、その時々で場所を変えて、居心地よく過ごすことができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室以外にのんびりとできるスペースは限られているが、利用者同士で居室を訪問し合ったり、テラスで好きな時に外気浴したり、別の事業所スペースや庭に出てほっと一息つかれる姿はよく見かける。GH以外の職員の協力も得られている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	動線に配慮しながらも、神棚、テレビ、持ち込みの家具やぬいぐるみ等、ご希望のものを置いていただける。	居室は全体的に明るく、温かみのある造りになっている。居室入口には名札をつけて、使い慣れたタンスや家族の写真、裁縫道具等の思い出の品々を持ち込んでもらい、一人ひとりの状況に合わせて居室作りが行われている。プライバシーが守られるよう居室には内鍵がある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下などの動線に妨げになる物を置かないように、居室入口には、本人の許可を得たうえで表札を大きく掲げたり、トイレの表示を行ったり、テラスの段差に渡し板を置いたり照明に配慮するなどして、「自由」と「安全」をできるだけ両立できるように配慮している。		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				